書　評・紹　介

外　山　　義　著

『クリッパンの老人たち――スウェーデンの高齢者ケア』

ドメス出版　1990年9月　225＋4ページ

人口高齢化が後期老人の増加という段階になると，公私一体となった支援体制が機能しなければ，社会をうまく維持していくことはできない．本書の著者外山　義氏は住環境の研究者であるが，ここで本書を取り上げるのは，高齢者の住宅環境を云々したいからではない．もっと基本的に，高齢化先進国としてのスウェーデンが，後期老人の増加という現実に対応して，その社会福祉政策を，どんな手順を踏んで確立し，国民の合意を取りまとめたか，その経緯を，長くその国にあった研究者ならではの視点でまとめているからである．

著者は，1982年から89年までスウェーデンに研究留学し，スウェーデン南部にあるクリッパンという町（人口16,000，中規模の地方自治体）で「後期高齢者生活自立度調査」を行った．この調査は後期老人がさまざまな公的私的援助を受けながら，可能な限りの自立を保って生活し，死にいたるまでを，一定の時間の間隔をおきながら追跡したものである．しかし本書は，必ずしもその調査の報告や分析を意図したものではない．むしろこの「後期高齢者生活自立度調査」の企画実施分析の過程を通して，スウェーデンが現在の社会保障制度を確立するまでの，さまざまな試行錯誤とそれに基づく政策決定の過程を明らかにするためのプロローグとして，その事例が紹介されているといったほうがいいかもしれない．

スウェーデンの高齢者福祉が，施設ケアから在宅主体のケアとそれをサポートするフォーマルケアの充実へと，短期間のうちに大きな方向転換を遂げた背景には，高齢化の進行，とくに，後期高齢者の増加という現実に，それまでの社会のシステムが対応できなくなったからであった．

この高齢化の進行，とくに後期老人の増加という現実に対して，まず政策決定のために，さまざまな分野の専門家が参加して，あらゆる側面から調査が実施されている．しかもその調査は，同一集団を5年後，10年後と追跡して実際の老化の過程を把握するだけでなく，同じ条件で第2，第3の客体が追加され，老化の過程についてのコウホート変化と加齢変化とが同時に得られるように周到に企画実施されたものであった．

ひるがえってわが国の現状を考えるとき，急速な高齢化にいかに対応すべきかについて，本当に科学的総合的な研究が行われているといえるだろうか．スウェーデンよりはるかに高齢化のスピードの速い日本では，「スウェーデンがそれぞれの時代のステージで進めてきた高齢化対応策を，平行して同時に進めてゆかなければならない」という困難さを背負っている（P．214）からこそ，先人に学び，科学的な研究をつみ重ねて自らの方向を見定めることが急がれねばならない．

われわれが本書から学ぶべき最も大切なことは，人口の年齢構造の変化が与えるインパクトに対応する政策決定には，それが未知の経験であるからこそ，科学的総合的な基礎研究が不可欠であることを明示したことにある．

公的ケアに多くをおっているかに見えるスウェーデンでも，家族的ケアの比重が大きいことはあまり知られていない．しかし，家族的ケアが可能となるためには，十分な公的ケアの裏付けが不可欠であり，スウェーデン社会においてもやはり，「formal care が informal care を補完しているのであって，その逆ではない」（P．83）という著者のことばは，「現場を知る」からこそ，その響きは重いというべきであろう．

（中野　英子）